



TITLE:

# 支那論におけるケネーとモンテスキュー

AUTHOR(S):

河野, 健二

---

CITATION:

河野, 健二. 支那論におけるケネーとモンテスキュー. 東亞經濟論叢  
1941, 1(2): 445-460

ISSUE DATE:

1941-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128656>

RIGHT:

京都市大學經濟學部  
東亞經濟研究所

年四回（三月、五月、九月、十二月）發行

# 東亞經濟叢論

第壹卷 第二號

昭和十六年五月

フランスの對支經濟進出の回顧……	經濟學博士 高垣寅次郎
重慶政府の戰時金融集權政策……	……十 龜盛次
法家の經濟思想……	經濟學士 穗積文雄
江海關通貨の推移……	商學士 大谷孝太郎
東亞社會政策の理念……	經濟學士 出口勇藏
日清戰爭に於ける清朝の財政政策……	經濟學士 柏井象雄
支那紡績勞働請負制度の様式……	經濟學士 岡部利良
支那論 <sup>における</sup> ケネーとモンテスキュー……	經濟學士 河野健二
支那銀行制度の調整……	經濟學士 徳永清行
東亞經濟圈に於ける米生産の發展……	經濟學士 大上末廣
東亞廣域經濟の爲替政策……	經濟學博士 谷口吉彦

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發賣

# 支那論におけるケネーとモンテスキュー

河野健二

## 一 序 言

西歐のひとびとの東洋に關する知識が、東方の神秘の國とか謎の國とかいつた中世紀的な觀念から脱却して、多かれ少かれ體系的なかたちを整へるに到るまでには、西歐の社會自身の實質的な發展がその基礎に無ければならなかつた。西歐社會の發展とは、先づ封建時代の割據的な領主政治の上に、次には領主政治に代つて、統一的な君主による國民國家が形成・創出されてゆく過程が是であつて、商品・貨幣經濟の一層の浸透とともに、絶對君主を中心とする初期の重商主義的政策が強力的に遂行された時代に他ならない。このときに及んで始めて西歐社會が自らの利害關係を外國とくに東洋と結ぶこととなつたのであつて、東洋に於ける豊富なる資源が西歐社會の近世的な發展のために不可欠のものとして考へられ始め、その獲得を繞つて西歐諸國家の角逐が開始され、西歐による近世の東洋侵略史の最初の一頁が開かれるとともに、西歐人の支那研究は始めて具體的な姿を採るに到つたやうである。

東洋とくに支那に於て布教に從來した西歐の宣教師達が多く、報告を故國に送つたことも、このような西歐社

會自體の發展と併せ考へられることが必要である。支那人固有の宗教をいかに取扱ふべきかに就いて行はれた『典禮問題』(Question des rites)に於ける論争が全西歐的關心の的となつたのも、西歐社會の事實上の發展がその基礎として働いてゐたことを見逃してはならない。『典禮問題』に於ける論争はイエスイ特派宣教師が支那人をキリスト教的國民として紹介したに對して、ドミニコ、フランシスコ派宣教師は支那人の偶像崇拜性を指摘して相争つたものであるが、此等の論争の基底には支那貿易の獨占を繞つて行はれたポルドガル、フランス、オランダ等の西歐諸國間に於ける争覇戦があつたことを忘れてはならないであらう。

併しこれら宣教師の齟齬した報告が、支那社會の統一的な認識からは尙ほ遠いものであつたことは言ふ迄もない。それは一つは宗教家としての彼等の地位に基くとともに他方、自國に於ては絶対君主の下に、支那に於ては専制君主の庇護を仰ぐ事によつてのみ布教に従事し得たといふ當時の政治上の事情に制約されたからであらう。事實、宣教師の報告は現實の支那社會に關しては多くその善政と繁榮とをひたすら謳歌する事をもつて主要なる内容とした<sup>3)</sup>。この點に就いては宣教師の報告よりも、商人達の種々の旅行記の方が實際の見聞を詐らなかつたがために、より眞率で正確であつたと言ひ得られる。けれども宣教師の教養に比ぶればなほ一段と劣つてゐたこれら商人達の旅行記が多く斷片的、印象的であつて支那社會の統一的な把握には未だ不充分であつたことは容易に考へられるのであるが、此等の旅行記の内容が宣教師の報告とは反對に、支那および支那人に就いて誹謗的な態度を採つてゐることは興味ある事柄であり、支那讚美と支那誹謗のこのやうな對立は其後の西歐の支那論者に於いて明かに二つの潮流を形造つてゐる。

- 1) 後藤末雄著、支那文化と支那學の起源、112頁。小林太市郎著、支那思想とフランス、53頁。
- 2) 石田幹之助著、歐人の支那研究、138頁。Ting Tchao-Ts'ing; Les Descriptions de la Chine par les Français 1650—1750.

十八世紀の啓蒙學者達は此等の宣教師の報告と旅行家の記録との二つを資料として、各々特色ある支那論を展開してゐる。<sup>3)</sup> 啓蒙學者は一般に、いかにしてアンシアン・レジームの蒙昧を脱して新しいフランスを作るかを課題としたのであるが、彼等が特に支那を採り上げて問題とした理由は恐らく支那および支那人が全社會的關心の的であつたことに由ると共に、支那論に於ても彼等が自らの所説を正當化せんとする意圖を有つてゐたからであらう。

こゝでわれわれは特にケネー (F. Quesnay) とモンテスキュー (Montesquieu) の支那論を振りかへつて見ようとするのであるが、啓蒙學者の内に於てこの兩者は一は近代的政治組織の、他は近代の經濟制度の成立を唱導した二人の偉大なる先覺であつたのみならず、その政治上の構想および經濟上の主張ならびにその支那論に於てこよなき對照を作してゐるからであり、更には西歐人の支那研究史上之ら兩者は特記さるべきものと考へられるからである。その政治的構想について言ふならば、ケネーは啓蒙君主の上からの改革に期待する開明的專制政治を擁護したに對して、モンテスキューは自由なる民主政治の出現を要望したし、その經濟的主張に於てはケネーが農業の近代化の上に立脚する重農主義の創始者であつたに對して、モンテスキューは英國流の重商主義を祖述した<sup>4)</sup>ものと考へられる。更にその支那論に於てはケネーが重農主義的な觀點から支那の開明的專制主義を賞讃したのに對してモンテスキューは絶えず腐敗する支那專制政治を厳しく批判して、之また興味ある對照を作してゐる。このやうな意味に於てわれわれはケネーとモンテスキューの支那論の内容を窺ひ、とくにその支那經濟論を紹介してこれと彼等の一般理論との關聯を明かならしめやうと思ふのである。

- 3) 島恭彦稿、啓蒙時代に於ける支那研究とその現代的意義、經濟論叢四十八卷五・六號。
- 4) 拙稿、モンテスキューの經濟思想、經濟論叢五十二卷一號。
- 5) 堀新一稿、重農主義の支那經濟觀、東亞問題一卷十一號。

## 二 ケネーの支那論

ケネーによれば社會の根本法は、人間的思惟から獨立した客觀的な物理的自然法則であるとともに、凡ゆる時代を貫徹する永久不變の法則であつて、それは全能の神の教智がつくるところの世界構成の一般的秩序のなかに包含されるものとして捉えられる。かゝる社會の自然的秩序 (l'ordre naturel) の法則は『生活資料および人間の生存・維持ならびに便宜にとつて必要な財の永續的再生産』の法則であり、之によつて『共同財に對して可及的大なる成功をもつて協力し、それにより社會人の凡ゆる種類の階級に可及的有利な分配を保證すべき』ものであるとせられる。人定法 (les lois positives) はかうした自然法の發現を後見すべきものとして存在する。人定法の目的は、自然法の遵守を保證することに依つて社會統治の實を擧げることにあるのは言ふ迄もない。かゝる人定法を制定すべき權力は、ケネーによれば、君主政治、貴族政治、君主政治のいづれにも屬すべきものではない。彼によれば、國家の最高權力のすべてを一身に集める専制君主には二つの種類があり、法によつて規定された絶對權力を行使する合法的または開明的専制君主と、非合法的、恣意的専制君主とが之であつて、前者すなはち合法的または開明的専制君主のみが主權の行使者として社會の持續的な存在と繁榮を保證する。かゝる君主は自らの恣意を妨止すべき法と機關とを有するが故に、社會の根本的ならびに自然的法則を發現せしめるに最も適してゐるからである。

『支那のデスポティズム』<sup>6)</sup> (Despotisme de la Chine) においてケネーは支那の政治をかゝる理想的な開明専制君

6) August Oncken; Oeuvres de F. Quesnay, Paris. 1888. Despotisme de la Chine. p. 642.

7) Ibid., p. 637.

8) Ibid., p. 563 - 960. 邦譯, 堀新一, 重農主義經濟學第一分冊, 勝谷在登, ケネー支那論。

主の統治形態であると理解する。支那の政治組織は『君主が悪を爲すことを豫防し、合法的な施政の下に善を爲すべき最高の能力を保證するところの拒否し得ない、有力な方法によつて自然法の上にうち樹てられてゐる』<sup>9)</sup>のであつて、善良なる君主と従順なる人民とによつて理想的な政治が其處で行はれてゐると考へる。かくしてケネーに於ては支那の行政組織、官吏、教育制度、刑法等のすべてが賞讃すべきものとして叙述されてゐる。

『支那のデスポティズム』は、支那の政治組織に對する賞讃とケネーの政治理論の展開とを主要なる内容としてゐるために、彼が捉へてゐる支那經濟がいかなるものであるかを詳論することは困難である。併し、重農主義にもとづく政治の模範として支那を把握してゐる限り、彼の支那經濟論の輪廓は自ら明かである。『支那のデスポティズム』に於けるケネーの經濟論の内から、重要と思はれる點を抜き出して以下考察しよう。

支那社會の階級構成についてケネーは言ふ『支那國民に於てひとは貴族と人民の二つの階級を識別し得るのみである。前者は王族・貴族・官吏・學者を含み、後者は農夫・商人・工人其他を包含する』<sup>10)</sup>言ふ迄もなくケネーは『經濟表』(Tableau économique)に於て生産・地主・不生産の三階級を擧げてそれ等の間の經濟關係を問題にしてゐるのであるが、支那に於ては彼は貴族と人民の二つの階級しか存在しないことを主張する。この支那に於ける二つの階級は彼の言ふ生産・不生産階級なる概念には嚴密には照應しないけれども、<sup>\*</sup>支那に於て彼が階級としての地主の存在を原則的には認めてゐないことが先づ注目される。西歐に於ける支那論者の一つの特色たる支那における國家的土地所有の概念を早くも此處に見ることが出來ると思はれる。<sup>\*\*</sup>尤もケネーが『經濟表』に於て地主階級を不生産階級の外に置いたこと自體が、彼の理論的探求の結果ではなくして政治的顧慮に基いたも

9) Ibid., p. 613.

10) Ibid., p. 581.

のであつたとするならば、彼が支那に於て地主階級を取り去つたことは支那の現實の階級構成の如何は問題外として寧ろ當然であると言ふことが出来よう。それは兎に角としてケネーは支那に於て二つの階級のみを問題としてゐるのであり、基本的には開明君主と農民とによつて構成されるところの彼の理想とする社會を支那に見出し、てゐることは注目に値する。

\* 人民のうちには彼の言ふ唯一の生産階級たる農夫以外に商人・工人が含まれるから。

\*\* アジアに於ける國家的土地所有を始めて歐洲に紹介したフランソワ・ベルニエの旅行記は十七世紀末に出てゐる故、或はケネーは之を知つてゐたとも考へられる。バルトリド著外務省調査部譯、東洋研究史一七五頁參照。

宣教師の報告は前述の如く支那の善政と繁榮との賞讃をその主なる内容とするものではあるけれども、支那に於ける老大なる貧民の存在を無視することはさすがに出来なかつたのであり、それに關する記述を残してゐるのである。この老大なる過剰人口の存在はケネーに於て如何に説明されたであらうか。此處に於てケネーが後年マルサスによつて定式化されたと同様の人口理論を唱導してゐることが注目される。ケネーは言ふ『富や人口を増大せしめるものは富に他ならない。』<sup>11)</sup>したがつて大人口は富の結果として現はれるのであつてその反對ではない。而して富の増大こそは善政の反映であるが故に、大人口の存在は結局善政の産物に他ならない。この限りでは過剰人口・貧民は發生し得ないこととなる。しかも支那に於て老大なる數の貧民が存在するのは何故であるか。ケネーは之に答へて言ふ『しかしこの（人口の）増加は絶えず富以上に及ぶ。この増加が時として不幸なる結果を招くのである』即ちケネーによれば人口の増大は富の増加の結果に他ならないけれども、然も一度惹き起された人口の増大は往々富の増加以上に及ばんとするのであつて、その結果として必然に過剰人口が發生するのである。

11) Oeuvres de F. Quesnay. p. 579.



支那に於ける貧民もこの例であつて、それは支那の政治の缺陷によるのではなく全く必然的な一つの人口法則の結果として現はれたところの絶對的な過剰人口に他ならないと言ふこととなる。ケネーは更に續ける『ひとは貧民の救助のための施物が政府によつて充分に獎勵されてゐないのだと信じるかも知れない。』しかし言ふまでもなく之は謬りである。何故ならば施物は『人間の生存に必要な富を再生産するところの勞働と富の分配の秩序からの控除分』<sup>12)</sup>であるからであり、『この故に人口が富を超過する際には施物は人口過剰による不可避な貧窮を補ふことは出来ないのである。』と主張してゐる。

政治理論に於て開明的專制主義の主張者であつたケネーが經濟理論に於ては『經濟學の眞の父』と成り得た理由は、封建經濟もしくはその上に立つ重商主義政策に對して農業の近代化の側に立つて近代的な經濟構造を解明することが出来たからであつた。封建的土地所有に對して近代的土地所有を主張したケネーは支那に關しても言ふ『財産の所有權は支那では頗る確實である。……奴隸や家僕すら之を有してゐる。』<sup>13)</sup>更に支那に於ては封建時代の產物である教會の賦課金のごときものは存在しない、『この國に於ては僧侶による十分の一税が土地に負擔せしめられることがないから農夫の取り前はわが國(フランス)に於て非常に良く耕作された地方の小作人の取り前と殆んど同様の割合を示してゐる。』<sup>14)</sup>ところが歐洲に於ては『農業や耕作經營に必要な富——偉れた人々の能力と富力によつてのみ支持され得る——の重要性を未だ感じてゐない國家が存在する。』として暗にフランスの遅れた農業を擧げて支那の近代的小作關係と近代的租税とを之に對比してゐる。

ケネーによれば支那の農業は右の如く全く理想的な發展を遂げてゐるために、外國貿易はそこでは『國家の廣

12) Ibid., p. 580.

13) Ibid., p. 599.

14) Ibid., p. 601.

大さに比例して頗る極限されてゐる。<sup>15)</sup>何故なら『支那人は自國に於て凡ゆる生活資料を見出す』ためにその必要がないからであり『彼等の主要な取引は帝國内部に於て同じ商品を産しない地方間に行はれる』と説くのである。ところで多くの旅行記は一樣に支那の貿易商人の惡徳を非難してゐるのであるが、ケネーはそれを次の如く辯護する。『外國貿易に餘り關心を有たない(支那の)政府は(支那商人の)詐欺的報復を默認してゐるのである。何故ならば商品を賣りさばくや否や居なくなる三千里も遠方の外國人を良秩序の下に従はせるのは困難であるから。<sup>16)</sup>』である。ケネーによれば支那商人の惡徳は外國商人の惡徳に對する報復たるに過ぎないのであつて、外國商人は取引が濟めば直ちに歸つて了ふ爲に其の惡徳を是正することは困難である。随つて支那政府は支那商人の報復をやむを得ざることを默認してゐるに過ぎないと言ふことになる。商人の惡徳は『支那のやうに開化した國民に於ては一層信じ難い。』とケネーは考へるのである。

以上の如くケネーは『支那のデスポティズム』に於て一方ではフランスのアンシャン・レジーム及び重商主義を批判しつつ、支那社會を基本的には開明專制君主と農民を中心として構成されるものとして理解すると共に、大なる人口と富とを擁して重農主義を實行しつつある繁榮せる・理想的な國であるとして支那を紹介してゐるのである。其處に於ては既に農業の資本主義化が進行してをり、支配者の農本主義は農民の勤勉と相俟つて益々農業を發展せしめつつあり、商業は農業に従屬したものとして必要商品の交換を齎らし、有害なる外國貿易は制限されてゐるといつた、つまりは彼が『自然的秩序』の下に考へたところの重農主義の理想のすべてが支那に於て實現されてゐるのを見たのである。

15) Ibid., p. 602.

16) Ibid., p. 604.

ケネーの重商主義政策の批判並びにその重農主義體系が多くの正しい理論を包含してゐたことは一般に認められるところであるけれども、彼が重農主義政策の實現を支那に於て見たといふことは多く異論の存するところであらう。<sup>\*</sup>殊に彼が宣教師の報告をそのまゝ繼承して支那の善政と繁榮を讚美したことは、彼の政治思想に於ける改良主義的限界が餘儀なくせしめたところであるとは言へ、宣教師が他ならぬフランス重商主義の派遣者としての經濟的役割を有つてゐたことを重農主義者ケネーは讀み取るべきであつたと思はれる。

<sup>\*</sup>ローゼンベルグはケネーの支那論を重農主義の「單なる宣傳であらう」と見てゐる。ローゼンベルグ、經濟學史一卷一八二頁。

### 三 モンテスキューの支那論

『法の精神』<sup>17)</sup> (De l'esprit des Lois) に於て、モンテスキューが法を事物の性質から生ずる必然的な關係として捉へてゐることは有名な事實である。法は従つてモンテスキューに於てすべての人民を支配する人間理性であると言ふことが出来る。かゝる人間理性は各國民の特殊性に應じて、特殊化され具體化されることは言ふを俟たない。そのための第一歩として法は先づ各々の政體の性質と原理との關係から考察されることとなる。周知のごとくモンテスキューはこゝに於て共和政と君主政と專制政の三つの政體を區別し、それらの原理を共和政に在つては徳性、君主政に在つては名譽、專制政に在つては恐怖心であると定義してゐる。モンテスキューが最も理想とし賞讃するものが共和政體とくに民主政體であることは勿論であるが、これらの原理、徳性とか名譽とか、腐敗すると

17) H. Sée; L'évolution de la pensée politique en France au XVIII<sup>e</sup> siècle. p. 202 參照。

き共和政は君主政に、君主政は専制政に墮落する。かうした各政體の變化は、良かれ悪かれ西歐に於てのみ起るのであつて、アジアに於てはその氣候的性質の故に、専制政は謂はゞ風土化 (naturalisé) されたものとして現はれる。<sup>19)</sup>モンテスキューによれば、専制政はアジアに於ては決定的なかたちを採り、アジアは如何にしても専制政から脱れることが永久に出来ないものとして説かれてゐる。文明を西歐に於てのみ認め、アジアを永遠に野蠻の國であるとするこのやうな考へ方が正しくないことは言ふ迄もないが、それはとにかくとしてモンテスキューはかゝる考へ方から支那をその氣候と土地の性質によつて決定された専制政治の國であると理解する。

専制政體は『ある一人が法も規律もなくして、その意欲と氣紛れによつて總てを率ゐる』<sup>20)</sup>政體であり、その性質上腐敗してゐるが爲に、絶えず腐敗する<sup>21)</sup>ものである。しかし『アジアに於ては權力は絶えず専制的でなければならぬ、なぜならもし極端な隷屬がそこになかつたならば、土地の性質 (廣大なる平野) と矛盾するが如き分割が起るだらうから』<sup>22)</sup>としてゐる。ケネーが宣教師の報告における支那讚美を多くその儘に承認してゐるに對して、モンテスキューは『法の精神』中の『支那帝國論』<sup>23)</sup>(De l'empire de la Chine) に於て、宣教師の報告に就き否定的な態度を採つてゐる。なぜならば宣教師によれば、支那帝國は恐怖と名譽と徳性なる各政體の原理を兼ね備した見事な政體であると報告されてをり、もしこの報告が正しいとすればモンテスキューの擧げてゐる三政體の區別は支那に關する限り無意味になつて了ふからである。モンテスキューは之に對して言ふ、『併し乍ら何事を爲さしめるにも鞭によらずんば不可能であるやうな人民に於ける名譽なるものが果していかなるものか、わたくしは知らない』<sup>24)</sup>『賢明な問題の提起とそれへの回答の後には、あらゆる奇蹟は消滅する。』宣教師達は(支那の)

18) De l'esprit des lois par Montesquieu. (Classiques Garnier). Paris. 1922, 邦譯, 宮澤俊義, 法の精神。

19) De l'esprit des lois. Time. I. p. 60.

21) Ibid., p. 115.

20) Ibid., p. 8.

22) Ibid., p. 272.

秩序の外観に欺かれたのだといふことを得ないであらうか。』自國に於て絶對君主に隸屬してゐた宣教師は、支那に於ても專制政治を見出すことを喜び、その庇護を得て布教に従事せんとしたのであらう、として彼等の報告の限界を明にしてゐる。かうしてモンテスキューは宣教師の報告よりも、むしろ商人達の旅行記の方により多くの信頼を託さうとしてゐる。旅行記は支那の官吏の強奪とか支那商人の惡徳を甚しく曝露してゐるのであつて、これこそモンテスキューが支那に就いて與へたところの、その性質上、腐敗し最も苛酷なるデスポティズムの特徴を遺憾なく示すものに他ならないからである。

恣意的な壓政を原理とする專制國家に於ては、嚴密な意味に於ける法は存在しないし、また存在したとしても無力であつて、そこに於ては謂はゞ習俗と生活様式とが専ら支配的である。モンテスキューは支那に於ける生活様式の不變なるとと煩瑣なる典禮に關して次のごとく述べてゐる。『生活様式が不變なのは支那に於てである。

……御辭儀の仕方が巧妙だといふ點で、ひとはその學者なることを認める。』<sup>23)</sup>支那に於て『生活様式、習俗、法、宗教はそこでは同じであるから、これらすべてを同時に變更することは出來ぬ。』<sup>24)</sup>支那に於ける典禮とはこれらの生活様式、習俗、法、宗教のすべてを含むものであつて、『ひとはそれを習得するのに青年時代の全部を過し、それを實行するのに一生の全部を過した。』<sup>25)</sup>ほど煩瑣きはまるものであり、かゝる不變的な生活様式、煩雜なる典禮を人民に強制することに、支那の立法者たちはその專制的支配の支柱を見出したのであると述べてゐる。

次にモンテスキューの眺めた支那經濟がいかなるものであつたかを見よう。氣候に關する決定論的な考へ方から、支那に於ては暴政にもかゝらず人口の繁殖が著しく促進せられ、その結果として食糧の不足が絶へず發

23) Ibid., p. 122—124.

25) Ibid., p. 304.

27) Ibid., p. 307.

24) Ibid., p. 123.

26) Ibid., p. 308.

生し、國家はそのため屢々危機にさらされる。支那の政府は従つて倦まざる労働を人民に強制することに全力を傾注せざるを得ないのであつて、これこそ苛酷なる專制政治の實體に他ならない。モンテスキューが理解した支那經濟は大體かくのごとき性格のものであつた。更にこれを彼の經濟思想との繋がりについて調べよう。

モンテスキューによれば、一人統治の政體すなはち君主政、專制政に在つては商業は一般に奢侈にもとづいて爲される。しかし『その主なる目的はその國民の自尊心、快樂および氣紛れに役立つ總てのものを獲得することに在る』<sup>28)</sup>これに反して多數統治の政體に在つては商業は節約にもとづいて爲され、それは餘剩物を有用にし、有用物を必要にすることにより諸國民を相互に結合し、富と繁榮とを齎らすと説くのである。ところで支那に於ては人民の生活は前述のごとく極度に不安定であるために、支那人は生存の必要上驚くべき活動力と過度の利得欲とを有つに到り、その結果、奢侈にもとづく商業に於て世界中で最も狡猾なる商人として立ち現はれることとなる。『支那では各人は自らの利益に注意せねばならなかつた。悪者がその利益を圖れば、欺された者もその利益を考へねばならなかつた。スパルタでは盗むことが許されてゐた。支那では欺すことが許されてゐる』<sup>29)</sup>かくしてモンテスキューは宣教師ならびにケネーが支那の國內商業を全歐洲の國內商業よりも大であるとして賞讃するときにも、次の如く述べて之に反對する。『もしも我らの外國貿易が國內商業を増大せしめないならば、それはさうかも知れない。然し、歐洲は世界の他の三つの部分（アジア、アフリカ、アメリカ）の商業と航海とを爲すのである。恰かも、フランス、英國およびオランダが殆んど歐洲の航海と商業とを爲すやうに』<sup>30)</sup>かう言つてモンテスキューは支那人の狡猾な商業に對して歐洲の節約に基づく商業を遙かに優れたものとする重商主義的な主張を誇りや

28) Ibid., p. 326.

29) Ibid., p. 311.

30) Ibid., Tome II. p. 37.

に示すのである。

モンテスキューによれば、商取引の發展は必然的に貨幣の使用に導く。貨幣は物の表徴であり物を代表すると同じく、物はまた貨幣の表徴であり貨幣を代表しなければならない。かゝる相對的價值に於ける相互の交換が圓滑に行はれるとき、國家は繁榮するのであるが、それは制限政體に於てのみ實現される。『專制政體の下に於て、もしも物がその表徴たる硬貨を代表することがあるならば、それは奇蹟であらう。蓋し、暴政と不信用が、總ての人を驅つて硬貨を地中に埋めしめ、従つて、そこでは物は決して硬貨を代表しないからである。』<sup>31)</sup>さらに貨幣を一國から他國へ運ぶ方法を與へるべき爲替相場も亦、專制政治の下に在つては行はれ得ないと考へる。次に利子附貸付はどうであらうか。『專制國家に於て貧困と財産の不安定は暴利を風土化する。……すべては奪はれる。借りる手段に至るまで。』<sup>32)</sup>従つて商業金融と高利貸とはこゝに於ては區別されなくて混同されてゐる。『これらの東方地方では、多くの人は何ら確實なるものを有たぬ。一定額を現在所有することと、それを貸した後これを回復し得る希望との間には、殆んど何らの關聯がない。』<sup>33)</sup>と述べてゐる。

次にモンテスキューによれば、一國の人口數は政體の性質、自然的條件、産業の三つの條件によつて増減する。苛酷なる專制政體の下では一般に人口は増大し得ないことは、『アメリカの女が自分の子にかゝる慘酷な主人を有たせない爲に墮胎する』<sup>34)</sup>のを見れば瞭かである。ところで支那の場合には、その苛酷なる政體にもかゝらず、世界にも稀なほど人口が増大するのは、モンテスキューによれば全くその氣候のせいには他ならない。『時として氣候が土地より恩惠的である。そこでは人民は殖え、饑饉がこれを亡ぼす。支那の場合はこれである。』<sup>35)</sup>『支那

31) Ibid., p. 44.

33) Ibid., Tome II. p. 67.

35) Ibid., p. 82.

32) Ibid., Tome I. p. 62.

34) Ibid., p. 80.

では幼兒の遺棄が行はれるにもかゝらず、人口が絶えず増加するから、土地から食糧を得るために倦まざる勞が必要である。<sup>36)</sup>しかし米産國は一般に他の地方に比べて人口數が多いことは、『米の出來る所では水を按排する爲に大勞働がいる。従つてそこでは多くの人たちが使へる。』<sup>37)</sup>からである。けれども他方、米産國たるこの同じ事情によつて『支那は米を産するすべての國のやうに屢々饑饉におそはれる。人民は餓死に瀕すると食を求めて四散する。』<sup>38)</sup>ために、人口數の減退がふたたび惹き起される。かゝる氣候による人口過剰と饑饉による人口減退との不斷の交替が、支那經濟を益々荒廢に導くとともに王朝の頻繁なる變更を必然化するに到る、と説くのである。

最後に支那の租税に關するモンテスキューの所論を述べてをかう。租税の一般原則は彼によれば次のごとくである。『臣民の自由に比例して次第に重税を徵集し得る。併し、隸屬狀態が増大するにつれてそれを輕減すべく餘儀なくされる。』<sup>39)</sup>従つて『專制國家に於ては、租税を増加するを得ない。なぜなら、極度の隸屬狀態を増加することは出來ないから。』<sup>40)</sup>この故に專制國家に於て租税は一般に輕微である。モンテスキューはこゝでフランスの絶對王政に對する聊喻的な意味を含めて次の如く言つてゐる。『損害を蒙つた州の租税を免除する東方の大帝國（支那）の格律は、よろしく君主國にもたらずべきだ。實ばその認められてゐる國家もある（フランス）。がそれはそれ無かりし時より多くの苦痛を與へる。なぜなら、君主の課徵高は依然増減がないから、……支拂ひの悪い村の負擔を減ずるために、支拂ひのいい他の村に増税するから。』<sup>41)</sup>である。

36) Ibid., Tome I. p. 124.  
38) Ibid., Tome I. p. 123.  
40) Ibid., p. 216.

37) Ibid., Tome II. p. 81.  
39) Ibid., p. 214.  
41) Ibid., p. 219.



#### 四 結 び

扱て、われわれは今やケネーとモンテスキューの支那論の終りに到達した。最後に『支那のデスポティズム』に於けるケネーのモンテスキュー批判を一瞥することによつて、兩者の相違の原因に簡単に觸れてをかう。

モンテスキューによれば、専制政治は本來的に苛酷なる性格を有つものであつて、専制君主が良政治を行ふなどといふ事は在り得ない。『支那の皇帝は、わが國の諸王と同じく、もしその施政が悪ければ、他人の生活が一層不幸になり、無力になり、窮乏することを悟らない。』<sup>42)</sup>ケネーは之に對して答へる。『たとひモンテスキュー氏が幸ひ支那の皇帝以上に宗教に通曉してゐるとしても、彼はやはり支那の皇帝が熟知してゐた自然法の教義や來世の信仰をそこに認むべきであつたであらう。』<sup>43)</sup>此點に於けるケネーとモンテスキューの相違はケネー自らが言つてゐるやうに、モンテスキューが『常に専制政治に於て專横な壓政的な政治を見たから。』<sup>44)</sup>であつて、結局は専制政治そのものの性質を如何に理解するかに繫けられてゐたやうである。

次に支那の貿易商人の腐敗について、モンテスキューが之を非難し、ケネーが之を辯護してゐることは既に上述した。重農主義的な考へ方に於てはすべては國內問題として提出され、解決されるであらう。ケネーに於ては外國貿易よりも寧ろ國內商業の方が重要であり、従つて支那商人の例外的な欺瞞は、ケネーによれば、支那の専制政治が苛酷であることの證據にはなり得ない。『こゝでは問題は、絶對的權力の行使の嚴重さとなんらの關係もない外國人との商業に關する個人の自由行動である。これは……頗る的外れの論争である。』<sup>45)</sup>として斥けてゐる。

42) Ibid., p. 124.

43) Oeuvres de Quesnay, p. 625.

44) Ibid., p. 927.

45) Ibid., p. 622.

更にモンテスキューが支那の人口過剰をその氣候から説明するに對して、ケネーは言ふ『モンテスキュー氏はこゝで結果と原因とを取り違へてゐる。<sup>46)</sup>』ケネーによれば大なる人口こそは善政あるひは富の蓄積の結果であつて、その反對ではないことは既に上述した。支那の人口過剰はケネーに於ては富の蓄積と人口の増大との間の比例的關係が破られることから説明される。こゝに於てもケネーとモンテスキューとの人口理論の上に於ける相違が背景となつてゐることを知ることが出来るであらう。

ケネーとモンテスキューの支那論およびそれと彼等の一般理論との關係はだいたい以上のごとくであると思はれる。一七〇〇年代のフランスの思想家が既にこのやうに現實的な支那論を展開してゐることは注目すべき事柄であると言はねばならないであらう。彼等は支那を論ずるに際しても各々自らの立場を守りつゝ全く對蹠的な結論に到達してゐるのではあるけれども、孰れも支那を専制政治の國であると理解し、或は社會の物理的法則の故に、或はその風土的環境の故に、支那を永久不變の、停滯的な國家であると把握してその歴史的な發展を否定し、特にモンテスキューに於ては支那の特殊な社會構造、隸屬制、不變の生活様式、王朝の不斷の交替、灌漑、商業の腐敗、暴利等々の問題が既に採り上げられ解明されてゐることは其後の西歐の支那社會研究の發展と考へ併せて多くの興味ある問題をわれわれに投げかけてゐる。そして又これら西歐の支那研究が西歐による東洋侵略といふ事實の上にうち樹てられたものであり、しかも今日この事實がまさに新しき秩序に於いて變更を加へられつゝあることを憶ふとき、新たなるわれわれの東洋研究に期待すべき問題はまことに重大であると言はねばならない。ケネーとモンテスキューの支那論の概略をこゝに紹介する所以である。

46) Ibid., p. 626.